様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：１３１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２５６０

研究課題名（和文）注釈・論義資料の発掘及び文体記述に基づく仏教漢文書記史の研究

研究課題名（英文）A Study on the Writing systems of Bukkyo Kanbun:Focusing on Tyusyaku/Rongi

研究代表者
磯貝　淳一（ISOGAI, Junichi）

新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授

研究者番号：４０３９０２５７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：　平安時代後期から鎌倉期成立の仏教漢文において、論義および注釈資料を中心にジャンルに固有の文体特徴と全体に共通する文体特徴の解明を進めた。実用的な側面を持つ論義の記録（法勝寺御八講問答記）の疑問助字の用法では、古記録類との類似性だけでなく、注釈書を含む仏典系漢文との類似性を併せ持つ実態が認められた。また、文体把握の分析単位を語から文章に広げるべく、周辺資料に対象を広げ、仏教説話『三宝絵』諸本（漢字文・平仮名文・漢字片仮名交り文）の接続詞の使用を検討した。その結果、接続詞が支える文章展開に和化漢文的な枠組みが認められ、表記様式の異なる資料間に共有される場合があることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to examine both common and genre-specific features in the writing style of bukkyo kanbun from the late Heian period to the Kamakura period. The key results are below. As a result, it was found that Rongi style has similarities to both kokiroku and tyusyaku. It then clarified the relationship between the conjunctions used to introduce bukkyo setsuwa and the overall writing style. The text chosen for this purpose were the books of “Sanbo-e” (kanjibun/hiraganabun/kanji-katakana majiribun).This revealed a framework for waka kanbun within bukkyo setsuwa that was common even in materials with different notation styles.
The above study has unveiled certain features of the writing style of bukkyo kanbun, which has lacked closer inspection when compared to kokiroku.

研究分野：日本語学

キーワード：日本語史　和化漢文　変体漢文　仏教漢文　文体史　書記史　用字法　文脈展開

１．研究開始当初の背景

仏家の手になる漢文は、質量ともに膨大な蓄積があり、日本語文章史に大きな位置を占める文章群である。しかし、日本語史研究への活用は、潜在的な資料の規模に対して進んでいない。特に、文章作成の目的に対応した言語資料の位相性の解明や、言語事象に基づく文体範疇の再構築は、日本語書記史研究において、今後に解決すべき事柄を多く残す研究領域の一つとなっている。

従来、漢訳を含む中国撰述の仏教漢文自体は、平安時代以降の日本語の様相を明らかにし得る有力な資料として訓点語研究に利用され、公家の言語とは位相を異にする僧侶の言語の実態、仏家内部の宗派・法統による言語の異なりや関わり等が明らかにされてきた。しかし、そこで中心となるのは「漢文理解」の言語としての漢文訓読語の有り様であって、日本語の「書記行為」の所産としての仏教漢文の研究は、積極的に進められてきたとは言い難い。また、仏家の文章や言語については、抄物類の研究に蓄積が多く存するが、平安時代後期に制作数が増大し、その後も書き継がれた漢字文についての研究は個別的なものに留まっていた。しかし、仏教漢詩文を日本漢文資料に位置づける中で、仏家の文章の解明が大きく進められ、法談の聞書類による研究も進展を見せつつある。一方、漢字文に限っても、僧侶の言語生活／書記生活に伴って生成された文章は、なお様々なジャンルに渉っている。殊に本研究で取り上げる「教義の注釈書類」「法会における論義の記録類」は、仏家の教学に関わる学問の所産であって、当該文章ジャンルは、仏家の文章の特色を考える上でも、重要な文体範疇を形成していると考えられる。近年、仏教史学研究においても論義法会の実態解明が進められ、僧侶の学問形態と漢文書記の実態との関連を解明するための環境は整ってきている。

このような問題意識に立って、研究代表者は、仏教漢文資料の調査を行い用字・用語の実態把握に基づく文体特徴の解明を進めてきた。また、本研究構想段階の調査研究で得られた成果と研究の展望についての発表を行い、その後調査を継続している。今後、新たな文献の収集・データ化による言語資料の整備を行い、当該文章群の言語的特徴の把握に基づく文体範疇の再構築を進める意義は大きいと考える。

２．研究の目的

本研究は、平安時代後期から鎌倉時代における日本撰述の仏教漢文の文体特徴の解明を目的としている。日本語学的な観点からの研究が進んでいない注釈書類・法会における論義の記録資料を対象とするのが本研究の特色である。用字・用語等の記述と文章構造の把握とを分析軸として、当該期の仏家の学問的活動における漢文書記の実態の解明を進める。そのために、未公刊資料の原本調査を行い、漢字使用の実態に基づいたデータベースを構築する。本研究によって、当該期の僧侶の学問形態とそこで撰述された仏教漢文の文体特徴との関連が明らかとなる。また、文章内容によって範疇化されてきた資料について、言語学的な観点に基づく再範疇化が進展することによって、将来的には仏教漢文の枠組み全体の見直しを図ることが可能となる。

３．研究の方法

本研究は、「論義・注釈資料群の基礎的調査」から「仏教漢文資料の文体範疇の再構築」へと研究を進展させる。研究内容として、（１）資料の原本調査、（２）調査資料の電子データ化とデータベース作成、（３）仏教漢文の文体特徴の記述と三つの柱を立てている。研究開始年度を中心に基礎調査を重点的に行い、次第に資料の言語の実態解明に基づく論義・注釈資料の文体特徴の記述へと研究内容をシフトさせていく。研究最終年度には、平安鎌倉時代の「注釈」「論議」に関わる仏教漢文における文体特徴の解明を目指す。

（１）については、平安時代後期から鎌倉時代に本邦で撰述された、僧侶の漢字文の収集・書誌的調査を中心に研究を進める。対象は、Ａ.注釈関係資料、Ｂ.論義関係資料とする。Ａの注釈関係資料については、高山寺所蔵の済暹・覚鑁の注釈活動関連資料を中心に資料収集と書誌調査を行っていくこととする。Ｂで対象とする『法勝寺御八講問答記』については、東大寺図書館（補足的に東京大学史料編纂所）において、天承元（1131）年～永暦元（1160）年分を対象として、書誌調査を行い、データ入力まで完了することを目標とする。

（２）については、本研究課題開始前の準備段階（平成 26 年度）で、調査及び電子データ化を完了している『顕密差別問答』『心月輪秘釈』『密厳浄土略観』各文献について、訓読文の作成・用字法の確定を行い、データベース構築の準備作業を行う。具体的な作業内容は、訓読文の作成、翻字本文の電子データに対する個々の漢字情報の付加（訓点の有無、推定音・訓、等）となる。

（３）については、集積したデータの分析が中心となる。調査資料における漢字の使用状況を相互に比較し、個々の資料を仏教漢文全体の中に定位していくために、①使用漢字の量的構造の把握、②指標的漢字の抽出・用字法の実態把握、③以上の検討に基づく論義・注釈両資料の関係性の把握を行う。様々に展開する僧侶の書記・言語活動において、学問的色彩が濃い部分に位置づく論義・注釈資料の特徴を把握することが目的である。この考察は、論義・注釈資料の仏教漢文資料へ

の再定位に関わり、他資料との比較を前提としている。また、分析の観点に関して、用字・用語を中心とした文体特徴の把握に加え、調査対象資料の文章構造の分析も行うこととする。具体的には、用字・用語との関わりにおいて、文章がどのように展開しているのかという観点から文章論・文体論的な考察を行う。現時点では、文章構造分析の観点とする言語事象に問答体の使用を挙げている。Aの注釈書類とBの論議の記録類とは、共に問答体による文章展開を行う資料群が存在するところに一つの特徴がある。各文献における問答体と文章展開との関連を記述し、文献相互の比較を行うための指標とする。

最終的には、仏家の学問的活動の所産である漢字文の文体範疇を言語事象の整理に基づいて確定する。また、仏家撰述の他ジャンルの文章・俗家の漢字文を含めた資料相互の比較に基づいて、調査対象とした諸文献の日本漢文全体における位置づけを明確にする。これらの研究成果をまとめ、本研究によって得られた成果を発表公開する。

４．研究成果

（１）資料の電子データ整備

本研究は、日本語史研究の対象資料として未開拓の状況にある文献を調査し、言語資料として供することを目的の一つとしており、この基礎的研究の段階で、以下の成果を得た（一部を資料、論文として発表）。

・翻字本文及び漢字用法情報付きデータベース。高山寺蔵『顕密差別問答』（済暹撰、建久六年写、第二部四十号）、高山寺蔵『心月輪秘釈』（覚鑁撰、院政期写、第二部一七四号・久安五年写、第四部一一八函九号）、高山寺蔵『密厳浄土略観』（覚鑁撰、治承五年写、第三部二一五号）

・翻字本文。高山寺蔵『打聞集』（聖応撰(覚鑁談)、鎌倉時代初期写、漢字片仮名交り文を含む、第一部二八一号）、『法勝寺御八講問答記』（宗性編、天承元年～久安六年分、未了）

・漢字索引。東寺観智院蔵『注好選』（仁平二年写）、醍醐寺蔵『探要法花験記』（源西編、保延三年写）

以上のデータが整備されたことにより、主として院政期の真言僧撰述にかかる注釈書類および談義の聞書、鎌倉期の宗性による論義の記録（院政期の論義を含む）、院政期成立の仏教説話・霊験記といった僧侶の学問・言語活動の各種ジャンルの文献について、言語的特徴の記述および比較を行うことが可能となり、以下に示す諸成果に繋がった。

（２）論義資料（仏家記録文）の文体特徴と和化漢文における位置づけの解明

本研究において論義の記録資料を対象とする意図は、従来、和化漢文（変体漢文）研究の中心となってきた公家の日記である古記録と比較しうる仏家側の言語資料の研究を進展させるためであった。文章作成の目的は異なるものの、所謂実用的性格を持つ文章について、その言語特徴を明らかにし、和化漢文全体の文体把握につなげるためである。

その一階梯として、『法勝寺御八講問答記』の文体特徴の解明を行った。まず、疑問表現における助字の使用の実態からは、「耶」字の使用に関しては仏家撰述の和化漢文（及びその背景にある仏教漢文類）の用字との関連が強いことが明らかとなった。また、判定要求における「歟」字の使用・疑問詞疑問文における助字の使用率からは、古記録類の用字との類似する実態が浮かび上がった。これらの項目が、資料の文体的特徴をどの程度有意に反映しているかという検証、また、疑問表現以外の言語事象による調査を行う必要性といった課題を残すものの、今回の結果から、『法勝寺御八講問答記』の文体特徴を考える見通しを得ることができた。本資料は、論義法会において仏家が教理を問答によって深めていった言説の記録である。その撰述の過程や制作の目的は異なるものの、公家の日次記たる古記録の用字と共通する特徴が確認されたことで、この種の文献群が仏家の記録文として位置づく可能性がある。但し、両者の「記録」の実態を反映した差異もまた存在しており、『法勝寺御八講問答記』の文章・文体を古記録類と単純に並べるわけにはいかない。共通性と見たもの自体の意味づけが今後の課題となった。

（３）文章構造から見た変体漢文と和漢混淆文の関わり

仏教漢文の周辺にあって、文章内容的に仏教教学との関わりを持つ文章として『三宝絵』を選定し、漢字文・漢字片仮名交り文・平仮名文と三種の異なる表記様式を持つ当該資料において、表記が異なる文章相互に漢文的な文章構造の枠組みが共有されていることを明らかにした。まずは漢字文である前田本『三宝絵』の文章について、種々の漢字文における位置づけを行った。資料全体を把握するために、所用漢字の計量的な考察と、使用度数上位の漢字が本資料の文章にどのように関わっているかという観点からの考察を加えた。所用漢字の異なり字の実態、助字の使用状況からは、同一文章ジャンルの説話・霊験記の文章に近い実態が浮かび上がった。また、接続詞の使用について『三宝絵』諸本間の比較を行い、文章の展開を決める接続詞の使用に、和化漢文的な枠組みが志向されている可能性を指摘した。

（４）注釈的活動に関わる談義資料の活用

研究開始時には、上述の論義関係資料と注釈関係資料とを比較しつつ研究を進める計画を立案した。注釈関係資料については、①に示した覚鑁・済暹撰述の文献の基礎調査を完了したものの、詳細な文体特徴の分析を行

うには至らなかった。しかし、僧侶の学問を総合的に捉える視点から、当初計画に含まれなかった資料を調査したところ、仏教の教学に関わる談義の記録（聞書）が言語資料として重要な意味を持つという見解に至った。そこで、あらたに覚鑁の談義の記録である『打聞集』（高山寺蔵、三帖）の基礎調査および翻刻作業に着手した。高山寺に所蔵される本資料は、夙に資料的価値を認められていたが、破損が大きいために研究が進んでいなかった。そこで、まずは全体の構成（談義の内容）把握を進め、一部の翻刻を行った。その文章は、漢字表記を主として、所々小書きの片仮名で活用語尾、助詞・助動詞を記す宣命体に近い表記様式をとっており、僅かに混じる自立語を片仮名で記す例には口語的要素を持つ語の使用も認められる。また、問答体を交えつつ、一部に「付云」「難云」等、講経論義に見える形式を交えて語られた談義の姿が記録されている。さらに、多くの仏教説話を含んでおり、経釈部と説話部とが異なる内容、文体を持って併存する資料となっている。すなわち、教学に関わる一連の談義（言語活動）が、漢字文優位（経釈）、片仮名交り文優位（説話）という異なる書記様式によって書き留められ、種々の言語事象の現れ方も内容に応じて異なるものとなっている。異なる文章内容・書記目的・書記内容の相関（文体差）が表出する様相は、仏教漢文における個別の文体とその違いを考える上で興味深い資料であり、本研究で措定する仏教漢文資料・文体範疇において紐帯的位置づけとなる可能性を持つ。今後研究を継続していくこととする。

（５）和化漢文の特質と言語研究

本研究が目指す和化漢文の文体把握は、用字・用語といった漢字と訓との結びつきを背景とした、謂わば表記レベルで捉えることができる観点に加え、小松英雄（『日本語書記史原論』1998、笠間書院）の言う「書記」概念に関わる「漢字文が選択される意味」から和化漢文を捉え直そうとする観点に基づく分析、研究段階を含むものである。そこで、和化漢文の特質の一つに「書記言語が反映される書記様式」という観点を設定することで可能となる研究の方向性の検討を行った。具体的には、明示的には接続語が担うことの多い文脈展開について、たとえば『三宝絵』のような説話の文章においては、時系列に沿って進む内容に対して、一端流れを断ち切ってその後の展開を示したり、時間的空間的に隔たりのある前後の事柄に因果的な関係性を与えつつ文章を展開させる働きであった。このことは、書記言語によって可能になる情報を構造化して蓄蔵する働きと関わりが深い。文章内に現れるこうした書記様式が日本語書記の歴史上どのように展開しているのか、またどのような文章ジャンルと相関をみせるのかは、「表記」ベースの研究では追究することが難しい問題の一つであることを指摘し、今後の研究の方法論的枠組みを示した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計７件）

① 磯貝淳一、醍醐寺蔵探要法花験記漢字索引、広島大学日本語史研究論集、査読無し、4 号、2018 年、pp.61-184、http://doi.org/10.15027/45296

② 磯貝淳一、高山寺蔵『打聞集』について付・翻刻（一）、平成 29 年度高山寺典籍文書綜合調査団報告論集、査読無し、2018 年、pp.22-33

③ 磯貝淳一、前田本『三宝絵』の文体について―説話の構造と接続詞の関わりから―、人文科学研究、査読無し、141 輯、2017 年、pp.17-39、http://hdl.handle.net/10191/49473

④ 森美智代・磯貝淳一、日本語書記史を観点とする日本語話者の論理意識に関する試論 ―出来事に対する時系列連鎖型の認識傾向に注目して―、国語教育思想研究、査読有り、14 号、2017 年、pp.36-44、http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00044834

⑤ 磯貝淳一、仏家「記録文」の位置づけ―「問答記」における疑問表現の整理から―、人文科学研究、査読無し、138 号、2016 年、pp.39-64、http://hdl.handle.net/10191/40578

⑥ 磯貝淳一、東寺観智院蔵注好選漢字索引、広島大学日本語史研究論集、査読無し、2 号、2016 年、pp.30-146、http://doi.org/10.15027/39520

⑦ 磯貝淳一、『伊曽保物語』の文体再考―天草版・国字本の比較から―（平成 26 年度新潟県ことばの会研究発表要旨）、ことばとくらし、査読有り、27 号、2015 年、pp.54-56、http://hdl.handle.net/10191/37031

〔学会発表〕（計５件）

① 磯貝淳一・森美智代・鈴木恵・田中宏幸・松崎正治、日本語書記史からみた『宇治拾遺物語』の教材的価値－学びのプロセスと日本語書記史を統合する学習材の開発－、全国大学国語教育学会、2017 年

② 磯貝淳一、日本語史からみる古典の教材化の観点、古典教育と古典教材研究の会、

2017 年

③ 磯貝淳一、和化漢文の特質からみた「書記」について、新潟大学教育学部国語国文学会、2017 年

④ 磯貝淳一、和漢混淆文における接続表現の文脈展開機能について、新潟大学言語研究会、2015 年

⑤ 森美智代・磯貝淳一、日本語書記史を軸とした「書くこと」の教育内容の分析、全国大学国語教育学会、2015 年

〔図書〕（計０件）

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
磯貝　淳一（ISOGAI, Junichi）
新潟大学・人文社会･教育科学系・准教授

研究者番号：４０３９０２５７